

1 気象概況（7月前半：果樹研究所）

平均気温は、1半旬が23.3℃で平年より1.5℃高く、2半旬が22.4℃で平年並、3半旬が23.3℃で平年より0.2℃高く経過しました。

1半旬から3半旬の降水量は26.5mmで平年の27%でした。

2 土壌の水分状況

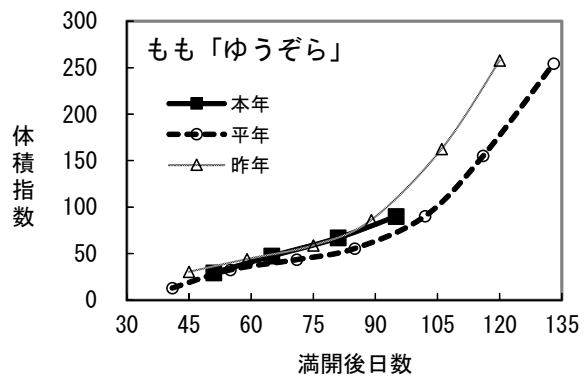
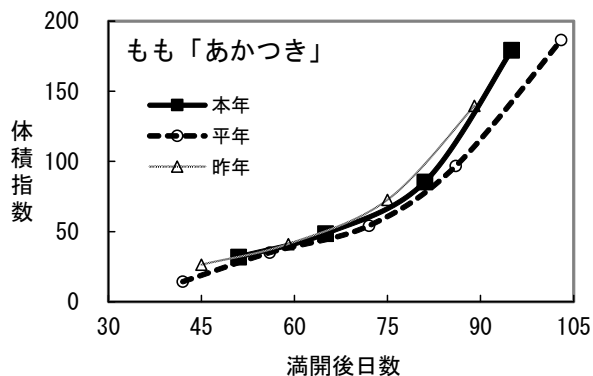
7月19日における土壌水分（pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水）は、深さ20cmと深さ40cmで2.7、深さ60cmで2.8となっており、乾燥状態にあります。

3 発育状況

(1) もも

ア 果実肥大

7月15日の暦日比較では、「あかつき」は縦径が67.8mmで平年比123%、側径が72.2mmで平年比127%、「ゆうぞら」は縦径が56.4mmで平年比115%、側径が54.1mmで平年比120%と両品種ともに大きい状況です。また、満開後日数による比較でも、「あかつき」と「ゆうぞら」とともに平年より大きい状況です。



イ 新梢生長

表1 ももの新梢生長（満開後91日）

（平年：1996-2015年）

	新梢長 (cm)			展葉数			葉色 (SPAD値)			新梢停止率 (%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
あかつき	9.7	13.1	74	14.2	15.7	90	45.6	44.8	102	100	91.2	110
ゆうぞら	23.8	13.6	175	19.1	14.5	132	42.3	45.6	93	73.3	93.0	79

注) 「あかつき」の生育調査樹は、筑波9号台16年生4樹からおはつもも台14年生樹へと変更。

ウ 核障害の発生

「あかつき」の満開後95日における核障害の発生は、核頂部の亀裂が15%、縫合面の割裂が5%であり、過去16年間の平均と比較するといずれも少ない状況です。

エ 収穫期の予測

DVRモデルによる「あかつき」の収穫期予測（7月19日現在）では、本年の収穫始めは7月25日頃、収穫盛りは7月28日頃で、いずれも平年より8日早い見込みです。

オ 早生品種の収穫期と果実品質

「はつひめ」の収穫始めは6月30日、収穫盛りは7月4日で平年よりも7～8日早まりました。

「日川白鳳」の収穫始めは7月7日、収穫盛りは7月11日で平年よりも8～9日早まりました。

「暁星」の収穫始めは7月15日で平年よりも8日早まっています。

表2 もも早生品種の収穫期と果実品質

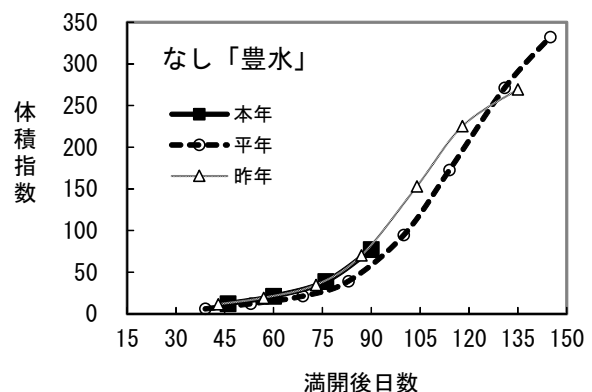
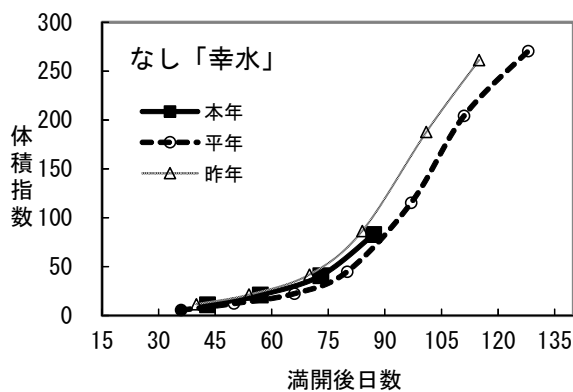
	収穫始			収穫盛			収穫終			果実重			RM示度		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
はつひめ	6/30	7/ 8	7/ 2	7/4	7/11	7/ 4	7/ 7	7/15	7/ 6	263	261	289	10.0	11.3	11.4
日川白鳳	7/ 7	7/16	7/ 6	7/11	7/19	7/ 9	7/15	7/22	7/13	248	230	257	10.6	10.7	11.6
暁星	7/15	7/23	7/13	未	7/27	7/16	未	7/31	7/19	未	215	235	未	12.7	14.5

※ 未は未確定。

(2) なし

ア 果実肥大

7月15日の暦日比較では、「幸水」は縦径が47.5mmで平年比122%、横径が57.8mmで平年比123%、「豊水」は縦径が48.8mmで平年比122%、横径が55.0mmで平年比127%と両品種ともに大きい状況です。また、満開後日数による比較でも、「幸水」、「豊水」とともに平年より大きい状況です。



イ 新梢生長

満開後80日（7月8日）における「幸水」の予備枝新梢長は115.2cm（平年比102%）で平年並、不定芽新梢長は100.6cm（平年比102%）で平年並、予備枝新梢の葉数は30.2枚（平年比98%）で平年並となっています。また、予備枝新梢伸長停止率は100%（平年比112%）で平年より高く、不定芽新梢伸長停止率は100%（平年比102%）で平年並となっています。

同様に「豊水」の予備枝新梢長は104.9cm（平年比98%）、不定芽新梢長は92.3cm（平年比102%）で平年並、予備枝新梢の葉数は28.5枚（平年比98%）で平年並となっています。また、予備枝新梢伸長停止率は100%（平年比116%）、不定芽新梢伸長停止率は98%（平年比113%）でともに平年より高くなっています。

ウ 「幸水」の裂果

「幸水」における裂果の初発日は、7月8日（満開後80日）で平年（7月14日：1990～2015年平均）より6日早い状況でした。

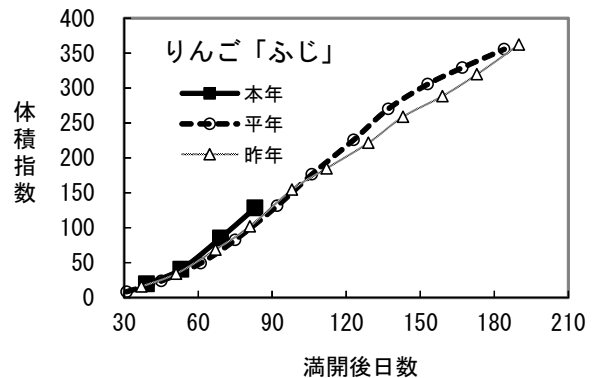
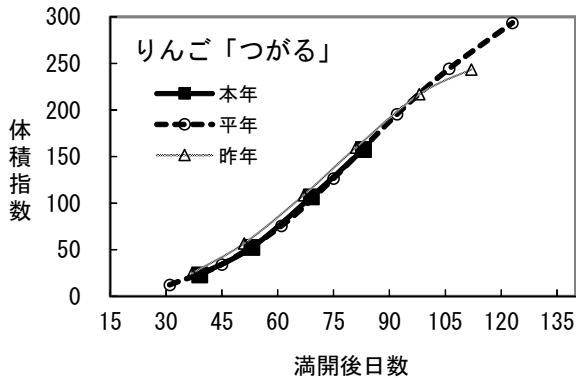
エ 「幸水」の収穫期予測

7月19日現在、DVRモデルによる「幸水」の収穫予測では、収穫盛期は8月23日頃（満開後126日）で平年より8日早い見込みです。

(3) りんご

ア 果実肥大

7月15日の暦日比較では、「つがる」は縦径が60.3mmで平年比106%、横径が70.7mmで平年比109%と平年よりやや大きく、「ふじ」は縦径が57.6mmで平年比112%、横径が65.2mmで平年比118%と平年より大きい状況です。また、満開後日数による比較では、「つがる」はほぼ平年並で「ふじ」は平年より大きい状況となっています。



(4) ぶどう

着色開始期は、「巨峰」（無核）が7月18日で平年より4日早く、「あづましずく」（短梢）が7月15日で平年より3日早い状況です。

4 栽培上の留意点

(1) 土壌の水管理

土壌の過湿は、葉の褐変や黄変落葉、根の障害を引き起こす原因となるので、停滞水が発生しやすい園地では排水対策を徹底しましょう。

本年は6月の降水量が73.0mm（平年比61%）と少なく、7月の降水量も26.5mm（平年比27%）と少ない傾向にあるので、今後、晴天日が続くようであれば、かん水を実施しましょう。

盛夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くします。

ただし、ももでは収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいので、かん水が必要な場合は早めの実施しましょう。

(2) もも

ア 修正摘果

硬核期が終了し、肥大不良果や変形果、核に障害をもった果実などが徐々に目立ってきています。このため、収穫を控えた中生種の修正摘果は数回に分けて丁寧に実施するとともに、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して修正摘果を実施しましょう。

イ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫期予測では、平年より8日早い見込みです。「あかつき」以降の中生品種においても、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施しましょう。

(3) な し

ア 新梢管理

不定芽新梢を含めた新梢誘引は、受光条件の改善や防除効果の向上、冬季せん定後の棚付けの省力化が図られることから、必ず実施しましょう。特に「豊水」の新梢は、湾曲したり下垂しやすいことから、新梢誘引により発生方向を整えましょう。

イ 修正摘果

「幸水」は裂果発生時期となるため摘果を控えましょう。裂果が終了（満開後90日頃）したら修正摘果を実施し、肥大不良果、果形不良果、障害果等を丁寧に摘果しましょう。

(4) りんご

ア 修正摘果

果形、障害の有無等の区別が付きやすい時期なので、小玉果、変形果、病虫害被害果、サビ果を中心に修正摘果を実施しましょう。

イ 枝吊り・支柱立て

果実の肥大にともない枝が下垂するので、樹冠内部の受光条件の改善、枝折れ防止及び防除効果の向上のため支柱立て及び枝吊りを実施しましょう。冬季せん定時に想定した高さまで枝を持ち上げ、養分が枝先まで達するようバランスを考えて実施しましょう。

(5) ぶどう

ア 着房数管理

ぶどうの着色の進み方は、果房中のいくつかの果粒が飛び玉状に濃く着色するのが望ましく、全体的にぼんやりと着色するような場合は、着果過多によるものと考えられるので、早急に着房数の見直しを行いましょ。

イ 新梢管理

新梢が遅伸びすると、光合成により生産された養分は新梢の伸長に消費されてしまい、果実への転流が少なくなります。果実品質の低下や新梢の登熟不良を防ぐために、遅伸びしている新梢の摘心や余分な新梢の整理と誘引の見直し、副梢の整理と摘心等を実施し、棚面の明るさを確保しましょう。

具体的には、7月下旬～8月上旬頃に、伸長が停止していない新梢を摘心しましょう。摘心は先端の生長点を軽く摘む程度に行った方が副梢の発生が少なくなります。伸長が停止しない副梢は2～3葉残して摘心しましょう。伸長が停止しそうな弱い副梢は棚面が混み合わなければ、そのまま放置してもかまいません。摘心後も棚下が暗い場合は、徒長的な新梢を中心に、新梢の間引きを行います。間引く本数は必要最小限にとどめるようにしましょう。

ウ 土壌水分管理

日中の蒸散量が多く、夜間の吸水量が多いような場合、縮果症の発生が多くなるとされています。樹体内の水分変動を少なくするために、過湿時には排水対策を施したり、梅雨明け後の急激な高温乾燥時には適度にかん水するなど、適切な土壌水分管理を行いましょ。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア りんご褐斑病

褐斑病は高温多雨条件で急増することから、薬剤散布は10日間隔で実施しましょ。

イ りんご輪紋病・炭疽病

輪紋病は高温多雨が続くと感染頻度が高くなります。また、炭疽病については梅雨期が

重点防除時期にあたります。輪紋病または炭疽病の発生が多い園地では、効果がある薬剤を十分量散布しましょう。なお、炭疽病の発生を抑制するために、園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物を除去しましょう。

ウ もも灰星病・ホモプシス腐敗病

現在、晩生種の灰星病及びホモプシス腐敗病の重点防除時期にあたるので、いずれの病害にも効果がある薬剤を十分量散布しましょう。

エ ももせん孔細菌病

降水量が多いと二次感染による発病が増加するおそれがありますので、引き続き注意が必要です。晩生種では、収穫前日数、使用回数に十分に注意して、薬剤防除を実施しましょう。

オ なし黒星病・輪紋病

現在、黒星病については「幸水」果実での感受性が高く、輪紋病は果実への感染が多くなる時期であるため注意が必要です。発生が多い場合は、黒星病・輪紋病に効果がある殺菌剤を十分量散布しましょう。

(2) 虫 害

ア モモハモグリガ

モモハモグリガ第3世代成虫の発生盛期は7月4半旬頃と予想され、第4世代幼虫の防除適期は7月5半旬頃と推定されます。本種の発生には無防除の花もも園や放任園などが影響していると考えられるため、無防除園の管理や放任園の伐採等の対策も必要です。

イ モモノゴマダラノメイガ

モモノゴマダラノメイガ第1世代成虫は7月3半旬頃から発生しています。被害の発生が予想されるモモ園では、中晩生種に対して7月下旬以降も防除を行いましょう。

ウ ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第2世代成虫の発生盛期は7月4半旬頃と予想され、防除適期は7月6半旬頃と推定されます。本種は第3世代からナシ果実への寄生が増加するため、例年ナシでの果実被害が多い地域では、近隣モモ園の芯折れに注意するとともに、第3世代幼虫以降の防除を徹底しましょう。

エ コガネムシ類

例年、ドウガネブイブイの羽化盛期は7月中～下旬頃です。ドウガネブイブイやヒメコガネ等が活発に飛来する時刻は、日没後から約3時間（18時～21時頃）なので、誘殺灯を使用する場合は、この時間帯に点灯しましょう。なお、もも園での被害が予想される場合は適宜防除を行いましょう。

オ ハダニ類

高温が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当り雌成虫1頭）の密度になったら速やかに防除を行いましょう。

表3 主要チョウ目害虫の防除時期の推定（果樹研究所 平成28年7月18日現在）

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ	
	第3世代 成虫盛期	第4世代 防除適期	第2世代 成虫盛期	第3世代 防除適期
2℃高い	7月20日	7月24日	7月19日	7月26日
平年並	7月20日	7月24日	7月19日	7月26日
2℃低い	7月21日	7月26日	7月20日	7月28日

注) 演算方法は三角法による。

起算日：モモハモグリガ 6月28日、ナシヒメシンクイ 6月16日

病虫害の発生予察情報・防除情報

病虫害防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>